

ベビーブーマー

アメリカ南部の
”古い支度“

この夏、米国南部のアトランタ市を中心に高齢者住宅や医療事情を見学した。老後の安心も力ネ次第、看取りはできるだけ在宅ホスピスに委ねる。米国流の”古い支度“は良くも悪くも一貫していた。

月額1万ドルの引退生活

シャンデリアの輝く大広間が迎える「Park Communities」は昨年12月に開設された(写真)。入居金は不用だが、193室は広さに応じ月額3300〜1万ドル家事、



高齢者住宅「Park-Communities」の大広間。

夕食付き)。プール、映画館も備え、パンフレットには女優ソフィア・ローレンが推薦文を寄せる。

入居者はまだ30人で、不況期にぶつかった苦境をうかがわせるが、オーナーは、ベビーブーマーのお金持ちが対象」と明快だ。米国の戦後生まれの引退時期は18年の長期に及び総計7800万人に上る。

設立25年目のLenBrookは入居金20〜90万ドル、家賃は月額2300〜6700ドル(家事・夕食代付き)。最高級は「億万長者」でもためらう値段だが、270室はほぼ満室で平均87歳、入居期間8〜11年。要介護者に60室を用意し、別に費用を徴収する。隣に25階建ての新館を建築中で、最高級は入居金130万ドル、家賃8000ドルだった。

主に自立した高齢者向けは「Independent Living」と呼ばれ、他に見学した数例を含め家賃兼食費は標準月額4000ドル前後。自宅を売って入居する例が多いだけに「サブプライムローン」が引き

金の全般的な不動産価格の下落は深刻な影響を及ぼす恐れがある。

中産階級向けも激戦状態

郊外にある「Arbor Terrace」は介護サービス付きの「Assisted Living」と呼ばれる。

入居者53人、平均85歳。月額3000〜4500ドル（入居時1カ月分必要、認知症は5100ドル）。入居期間は平均30カ月と短い。スタッフは看護師2人をはじめ大半は介護職で計46人。黒人が目立つ介護職の賃金は年収2・5万ドル程度。インド人の総支配人は「同種施設が半径16キロ以内に5箇所も開業し、競争は激しいが、粗利益25%の儲かるビジネスだ」と言う。

介護付き施設でも医療の手当では薄く、少数の看護師頼み。「ここであるべく看取るが、輸血や点滴が必要な場合はナーシングホームやホスピス施設へ移ってもらう」。低所得者向け住宅は数少ない。

その1つ「Chandler Senior Residence」は昨年11月に開設され、州の援助で非営利団体が運営する。64室に夫婦ら計75人が暮らし、所得や家族数に応じた公費補助で家賃は月316〜550ドル。「45人が空き部屋を待つ」状況。

別に140室の古いアパートが並び、住宅群の真ん中にあるサービスセンターに薬剤師が派遣され、病気がちな入居者に主治医の指示した調剤薬を配布していた。

ホスピスという看取り

ホテル並み施設でも質素なアパートでも看取りには看護師を軸にする「ホスピスチーム」の派遣を求める例が多い。末期がんに限らず「余命6カ月」を原則に病名を問わずホスピスの対象にされる。

アトランタ中心部から車で2時間余、緑豊かな丘陵地にある「St Mary's Hospice」は米国では珍しい施設ホスピスも運営していた。10年かけて寄付を集め、2年前に

12床でスタートした。「政府の方針で1事業体の在宅ホスピスは患者総数の80%以上と義務付けられる。約70人の在宅患者にスタッフを派遣しながら施設を設けた。在宅ケアが難しい場合や家族がパニック状態の際に預かる」と看護師の女性所長が説明してくれた。

ナースステーションの両側に病室が並び、一見して重篤な患者が多く、平均10日程度で亡くなる。周辺には同じカトリック系の病院団体が運営する自立した高齢者住宅、介護付きアパート、認知症の高齢者施設が点在し、その住民たちの最後の頼りになっていた。

アトランタ行政当局のパンフレットは、今後15年間で60歳以上人口は倍増し、地域社会の変革を促す」と呼びかけていた。75歳以上が倍増する日本と比べ、まだ「若い大国」ではある。

宮武 剛（みやたけ 剛）

早稲田大学政経学部卒。毎日新聞社・論説副委員長、埼玉県立大学教授を経て、現在、日白大学教授。近者に介護保険の再出発、医療を変える・福祉も変わる（保健同人社）